



地域の知恵を分かち合える場を ICTを活用して作り上げる

文・江口絵理 撮影・柴佳安

地域生涯学習の草分け

富山大学の一角で行われる「富山インターネット市民塾」の講座の一つ、「めだかの学校」に、参加者が続々と集まってきた。平日午後のためか多くが70歳以上のシニアだが、皆、自身のiPadを持ち寄り、わからないことを解決したい、こんなことができるようになりたいと目的意識をもって学びに来る。

富山大学の学生も講師として参加しているが、市民塾創設者の山西潤一さんは「この講座の特徴は講師が一方的に知識を与える講義形式ではなく、先生や生徒を固定せず、わかる人がわからない人に教える学び合い方式であること」と語る。

市民塾の前身は、1998年に当時富山大学教授であった山西さん、富山県の富山県生涯学習カレッジ、インテックの3者が共同で始めた、ネットを活用した生涯学習の実証事業。事業終了と同時に「インターネット市民塾」として出発し、以後20年以上も活動を続けている。地域における生涯学習事業の草分けともいえる存在だ。

山西さんは富山を拠点に、教育にテクノロジーをどう活用するかを考える教育工学の研究者として実践的かつ先駆的な研究を展開してきた。

「この研究を始めた1980年代後半は『教師と生徒の人間的な絆にコンピュータを介在させるなんてとんでもない。教育を勉強し直せ』とずいぶん批判を受けました」とのこと。

しかし山西さんが目指していたのはコンピュータに教師の代わりをさせることではなく、生徒がコンピュータを使って自分の考えを確かめたり、創作表現活動をする使い方。ICTは



1950年富山県生まれ。富山大学名誉教授。専門は教育工学。富山県生涯学習カレッジ、インテックとともに立ち上げた「富山インターネット市民塾」は、文部科学省のインターネット活用教育実践コンクールで内閣総理大臣賞を受賞（2002年）

あくまで“道具”に過ぎない、と山西さんは強調する。

ほどなくインターネットが勃興するが、その時も山西さんが追求したのは、ネットを仮想空間として使うのではなく、リアルな人と人をつなぐために使うこと。ネット経由で海外と富山の小学校との距離を超えた交流を行うなど、さまざまな可能性を探るうちに、山西さんは、知の交流の場としての新しい生涯学習を形成するネットの可能性に気づいた。

誰もが社会にアウトプットを

それまでの生涯学習といえば、教養を身につけて心豊かな人生を送りましょう、という思想で設計されたものがほとんど。対して山西さんは、「専門家から非専門家への一方通行の知識伝達ではなく、誰もが知恵や知識を発信し共有し、新たな知を創造する協働的な学びの場」というまっ

たく新たな概念を打ち出した。シェアリングエコノミーという概念も言葉もなかった時代。山西さんの先見の明は抜きん出ている。

「市民塾は『知のフリーマーケット』なんです。知識を得ると同時に、それぞれが持っている知恵を社会に対してアウトプットする場でもある。地域や世代間の結びつきが希薄になってきている現代、おいしい漬物の作り方を近所のおばあちゃんに教えてもらう機会や、町の歴史に詳しいおじさんに話を聞きながら街歩きをする機会など、なかなか得られないものです。しかしネットを使えば、地域で埋もれていた知恵や知識を可視化し、分け合うことができるのです」

結果的に市民塾はいま、高齢者の社会参画を促す場にもなっている。教育現場でのICT活用や地域コミュニティの希薄化、少子高齢化……。その時代時代における社会課題に、市民塾は新たな解を呈示し続けている。